

シャロレ伯爵 (2)

リヒャルト・ベア = ホフマン著
松川 弘*・訳

(平成28年10月31日受付)

Der Graf von Charolais (2)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 31, 2016)

ロモント :

あなたは思い違いをしてるよ。

宿屋の主人 :

思い違いなんかしてませんよ。

私は、女という生き物をよく知ってるつもりです！
穏やかにその件で話し合うこともできますし、すべてを話
して聞かせることだって・・・

宿屋の内儀 :

どんな獲物か、あなたは何も御存じないようですね・・・

ロモント :

女じゃないんだがね・・・

宿屋の主人 :

年増の乳母ですか——存じますよ——あなた方がこっち
に来られるのを、ちゃんと見てましたからね！

もうねんごろなんでしょう——慎重ですね！

ロモント :

最後まで聞けよ・・・

(主人の父がやって来て、腰掛けにすわる)

宿屋の主人 :

こっちだって。

あなたも私に最後まで言わせてくれないじゃないですか！

ロモント :

(同意して)

分かったよ！

宿屋の主人 :

ご婦人は、ここから——仮面をつけて——中庭を歩いてい
きます。

馬小屋のところで外へ出て、垣根に沿って、古い城門のそ
ばの小さい木橋のところまで来ると、仮面をはずすんです
よ。

彼女がここにいたなんて、誰にも分かりません。

城門の脇の織物屋で、彼女はテーブル掛けを平気で注文さ
えます。

こんな具合ですよ！

ロモント :

それで終わりかね？

宿屋の主人 :

ええ。

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

全部ではありませんが——どうぞ、おっしゃって下さい。

ロモント：

(いらいらして、いきなり)

俺は、シャロレの若旦那を待ってるんだよ。

宿屋の主人：

(仰天して)

何ですって？

ロモント：

シャロレの若旦那だよ。

要するに、ご主人、俺たちには、一銭の金の持ち合わせもないんだ。

あと五日で、給料が支払われるんだが。

そこで相談なんだが、三日ほど、俺たちと馬を、ここに置いてはくれないだろうか？

宿屋の主人：

いいですとも！

ロモント：

あとで、俺たちがあんたをだましたなんて思わないでくれよ。

宿屋の主人：

(気を悪くして)

大尉さん！

ロモント：

(声をひそめて)

それからもうひとつ。

俺の友達はちょっと怪我をしている。

他のものには軽い切り傷でも、彼の場合には、それが大きな傷になって、出血がなかなか止まらないんだ。

みんなが自分のことをあわれに思っていると、彼は信じている。

そのことを考えに入れてやってくれ。

女中や馬丁にも、丁寧に対応するよう言ってくれ。

宿屋の主人の父：

もちろんです！

宿屋の主人：

候爵並みのおもてなしをいたしますよ！

あの方はどこにおられるんです？

ロモント：

城門のところで、彼は、債務者監獄の方に曲がっていった。父親の遺体が置かれている場所を、この目で見ようというんだらう。

もうすぐこっちへくるに違いない。

宿屋の主人：

(興奮して、大あわてで)

上着と帽子を出してくれ！

(女中が入ってくる)

寝台にシーツを敷くんだ！

それ、そのの・・・

(食器を指し示す)

片付けるんだ！

その寝台はまだ乱れたままじゃないか！

この馬鹿！

片付けろ！

半分したらあとはほったらかしなんだからな！

宿屋の内儀：

(ドアの敷居のところまできて、振り返る)

何がお望みなのか？

あの子には・・・

宿屋の主人：

(荒々しく、あざけるように)

二本しか手がないんだらう。

まるでこっちの責任みたいに、みんな俺のことを悪者にする！

けどな、あいつは、若い男にいったん惚れたら、二本どころか、四本の腕でつかんで離さないんだぜ！

昨日ここである男があいつを待ってたが無駄だった。

待ってる若い男の胸にあいつは飛び込んでいかなかった！

あいつは、ずる賢く、男を食い物にしたんだ！！

別の時には、あいつは内気に振る舞うことだってできる！

昨日から俺が言ってるだらう！

この家のことを、お前はいったいどう思ってるのか、俺にはとんと分からんよ。

宿屋の内儀：

(上着と帽子をもって戻ってきて、主人が部屋着を脱ぎ着替えをするのを手伝う)

あなたは、あの子に厳しすぎるんですよ。

宿屋の主人：

(あざけり笑って)

俺が厳しすぎる！

ように！

お前は俺ほどあいつのことを知るまい！

御覧下さい、大尉さん、この脚は形が端麗なことで有名だったんです！

ロモント：

もちろんだとも！

それに首を見てやってください！

服だって、胴着の胸ぐりを大きくして、自由に着こなしてたもんです。

宿屋の内儀：

伯爵様は、朝食がまだなのでは？

『ダフネ』という歌劇では・・・

ロモント：

そのことは、さっきも言ったはずだろう。

宿屋の主人の父：

誰かやって来やしないか？

音がするぞ！

女中：

部屋に寝台の用意は出来てますが！

ロモント：

（窓のところで、手を振って）

上がって来いよ！

彼はもう下に来ている！

（全員が戸口に行く）

宿屋の主人の父：

（手探りで歩み寄り、シャロレの垂れ下がった腕をとらえて、口付けする）

伯爵様！

私にはあなたが見えません。

私は盲目なのです！

宿屋の主人：

（とても興奮して）

そのままです！

私だけが下で出迎えますから！

お前は（内儀に）階段の上に立っててくれ。

親父さん、あんたはそこであの方を待ち受けてください。それに、お前は（女中に）そこに立ってて、あの方が来られたら、深くひざまずき、部屋にお通しするんだ！

ロモント：

スモモや葡萄酒の話はあとだ！

いいか！

（彼は戸口に駆け寄る。シャロレが入ってくる。彼は、ロモントと同じような目立たない制服を着ていて、帽子は脱いでいる。しつこく話しかける宿屋の人々に取り囲まれながら、シャロレは、彼らに構わず、わき目もふらずにゆっくり歩くが、時折、彼らに行く手をさえぎられて、右前に出る）

シャロレ：

（立ったままで、小声で）

父上！

彼にかまうな！

彼は、父上のことを話しているんだ！

ロモント：

（彼に向かって）

やっと来たね！

ロモント：

（決然と、しかし声を抑えて）

だめだ！

彼を放ってはおけない！

法廷に出る前に、君には休息が必要なんだ！

宿屋の主人：

（おうむがえしに）

遅すぎました！

伯爵様！

あなたが今日町へ、そしてここに来られたきっかけは、実に嘆かわしいものです！

今度来られるとき、そのきっかけが明るいものであります

宿屋の主人：

もしよろしかったら・・・

ロモント：

いや！

俺たちには何もいらぬ！

もし何か用があれば、鐘を鳴らすから。

俺たちは話し合わねばならないんだ！

宿屋の主人：

(気を悪くして)

お邪魔をするつもりはないんですがね！

出ていきましょう！

(他の者を連れて出ていく)

ロモント：

これでよし！

まあ、腰を下ろしてくれ！

(長椅子を指し示す)

そこじゃない！

そこはすわり心地が悪いんだ！

(腰掛けをうまく彼のそばに押しやる)

ここどうぞ！

疲れているんだろう！

シャロレ：

(腰を下ろして)

その通りだよ！

(帽子を脱いで、それを机の上に置く)

ロモント：

(ゆっくり二、三步進み、振り返って探るようにシャロレを見つめる)

棺桶を開けさせたんだろう！

君の様子を見れば分かるよ！

そんなことをするなって、言っておいただろう！

シャロレ：

(元気なく穏やかに)

そうせずにはいられなかったんだ。

ロモント：

(うなずき、声をひそめて)

父親の醜い姿を見て、取り乱しているんだろう。

シャロレ：

(部屋に入ってきてから初めて顔を上げる。小声で穏やかに)

醜い？

いや！

醜くはない！

年老いているだけだ！

でも、分かるかね、ただ老けたんじゃない。

あれは普通の老い方じゃない！

父上ではなく、地下納骨堂で千年間眠っていた先祖のようだった。

もとは彼だったんだろうけど、そう、今は、彼とは似ても似つかない代物だ。

僕たちを結び付けているのは、もはや血ではなく、名前だけさ！

父上は、そんな姿で横たわっていた！

すでに千年もすべての生から、そして僕から遠ざかっていたように。

子供の僕が強情を張っていたとき、彼は天幕の戸口から出てきて、こう言った。

「言うことを聞かないと、父さんはどこかへ行ってしまって、二度と戻ってこなくなるよ。お前のこともきれいさっぱり忘れてしまうよ！」

僕がどんなに許しを求めて泣いたことか！

(つらそうに微笑んで)

もう、彼は立ち去って、二度と戻ってはこない！

そして、もう二度と、僕のことを思い出してはくれないんだ！

ロモント：

(肩をすくめて)

君は、今日初めて、死とは何たるかを知ったのか？

シャロレ：

僕は、父上のことを夢にみるだろうか？

夢のなかでは死者の生きている姿に会えるということ、君は、聞いたことがあるかい？

彼らは、生者と同じように立ったり、歩いたり、話したりする。

でも、夢をみている者には、それが死者であることが分かっているんだ。

他人がやってくると、彼はそいつに目配せする。

「シッ、彼らが死んでいることを漏らすんじゃない！ あのかわいそうな者たちはそれを知らないんだ！」

思うところを言ってくれないか？

僕は、父上に会えるのだろうか？

彼と話が出来るのだろうか？

(彼は、腕を胸に押し付ける)

彼の身に降りかかったことを一言も漏らさないとすれば、愛はすべて、窒息してしまうに違いない。

彼は、答えてくれるだろう。

僕の指は、彼に触れるだろう！

だが、僕は—— どんなに間近に見えても—— 僕と彼のあいだに死がポツカリ口を開けていることを知るだろう！

ロモント :

(シャロレの方に進んで)

親父が子供よりも先に死ぬのは、当たり前だ。

その順序が逆なら、それは天罰か呪いのように思われるだろう。

シャロレ :

もちろん、その通りだ！

これは慰めなんかじゃない。

それは、自然の外に、僕たちが会おうような善や悪は存在しないからだ。

父上は、皇帝マルクス・アウレリウスの著作をよく読んでいた。

その中には、このことがすでに記されていた。

僕は、慰めなんか知らない。

君も知っての通り、僕は昨日もう飲んだり食ったりしていたじゃないか！

これを笑うことができるかい？

かつては笑い事だった些細なことが、時とともに、まともなことだと分かってくるんだ！

彼が今なぜ死ななければならなかったのか、と問うつもりはない。

しかし、ロモント、君は父上のことをよく知っていたんだらう、だから、教えてくれないか、彼は何のために生きてきたのだらう？

ロモント :

彼は軍司令官だった！

シャロレ :

(悲しげに微笑んで)

君は、よく人が絵に描くような軍司令官のことを考えているね。

頭をグッと反らせて、目で指揮をとり、元帥杖を脇腹に当てている例の姿さ。

その背後には、緋色の天幕、戦闘の有様が半ば簡略化されて描かれ、砲火と砲声、ひるがえる旗、たてがみ、棒立ちになった白馬、短い太鼓の連打、輝かしく、高らかに響く勝利のファンファーレを予感させる！

彼はそんな風に見えたのか？

戦争は、彼の楽しい手仕事だったのか？

彼には、戦争の背後の平和が見えたはずだ。

そこに至る道を自分の剣で——血と悲惨で——切り開くことが、彼に課せられていたのだ。

そのように彼は運命付けられていたのであって、白羽の矢を立てられたわけではない！

ロモント :

しかし彼は決して……

シャロレ :

不平を言わなかった、そうだらう？

決して。

そのことで彼は僕を欺かなかった。

考えてもみる。

(次第に早口に、強い調子で)

彼は十四歳で孤児になり、親類のもとで育てられ、二十四歳で結婚した。

母は、とても高貴な家系の疲弊し零落した子孫だった。

父上は彼女を愛していた。

そして、三十歳で男やもめになった。

その名義を僕が受け継いでいる全財産のうちで、石ころひとつ、足の幅の土地さえ、彼のものではないんだ。

僕の人生は、軍隊とともに始まった。

彼は、片時も僕を自分のそばから離さなかった。

昼の間、彼はそとに出かけていた。

毎朝、毎晩、空が白んでくると、彼は、自分の天幕の灰色の壁を見つめていた。

年月が過ぎ去り、僕は成長し、彼は年をとった。

彼は、何を期待していたんだらう？

平和だらうか？

彼は、大公の館のあちこちに立つ零落した人々の群れを、あの宮廷の厄介ものを、もっと増やすつもりだったんだらうか？

帰郷できることを、彼は望んでいたのだらうか？

帰郷！

いったいどこへ？

彼は、僕に、自分の息子に望みをかけることができただらうか？

彼は、自分に言い聞かせていた。

「この子は、お前にはないものを持つようになるだらう。家系の栄光を新しく創り出すことだらう。妻と子、財産と故郷を持つようになるだらう。この子の願いがかなうのなら、俺は喜んで退官しよう」

僕は、そうした希望を呼び覚ます子供だったんだらうか？

この僕が！

彼が施しものをして、「まあ、ご立派な坊ちゃんで！」と後から叫ぶ女乞食はいなかった。

この僕を賢いと思う者がいただらうか？

「この子は、きっと偉丈夫になりますよ！」とあえて嘘をつくものがいただらうか？

ロモント、君も知っての通り、僕は、今も昔もこの通りだ。人より賢くもなく、強くもなく、勇敢でもなく、立派でも

ない。
大きくもなく、小さくもなく、何かあることで他人よりほんの少し抜きこんでいるということもない。

ロモント：

君の父上は、それらをすべて別の目で見えていたんだ。
彼は決して不機嫌ではなかったし、暗くもなかった。

暗い！

彼が！

彼の言葉は、どれも清澄さにあふれ、欲情や憎しみ、ねたみに発する、熱い吐息とは無縁だった。

彼が俺たちに話しかけたとき、その浮世を忘れさせる寛容さに、俺たちは、自分を恥ずかしく思ったものだ！

シャロレ：

ロモント！

幸福な者は——いや——まだ願いや望みをもっている者は、こんな寛容さを持ち合わせていない。
寛容さの育つ土壌には、多くのものが染み込んでいなければならない。

多くのものが葬り去られねばならないんだ。

父は、自分にはもう何も望みをかけず、僕にもほとんど期待していなかったんだらう！

ロモント：

(腹を立てて、早口に)

何を言ってるんだ？

君の父親を知らず、君のことも知らない者が、君の言うことに耳をかすと思うかね？

彼は將軍じゃなかったのか？

有名じゃなかったのか？

そして、君は出来損ないなのか？

彼は、君のことを結局恥ずかしく思っていたのか？

君のことを愛してはいなかったのか？

シャロレ：

(しあわせそうに微笑みながら)

彼は、僕のことを愛してくれていた。僕がそのことに気付いていたなら！

(低く小さな声で話し始める)

君の知っての通り、僕は、母親もなく、天幕の中や鞍の上で成長した。

「故郷」という言葉は、僕には、旅人から偶然その名を聞かされた未踏の陸地のようによそよそしいものなのだ。
僕の父は、極貧の農夫がその子供に与えるようなものすら、僕に与えることができなかった。

彼はそれに気付いていたし、そのことを気に病んでもいた。その代わり、僕は、戦争や遠征が僕たちに与えてくれるものを、少なくとも手に入れはした。

朝の呼び声は僕たちに教訓を吹き込んだ。

「行く手にはすべてのものが横たわっている。我々の進軍は性急だ！ 日々、新たに、娘が、金が、名誉が咲き誇る。みんな下馬することもなく、馬上からそれらを拾い上げる。次の休止までととも待てない。日々これ人生！ こぶしや剣を振えば、すべてにけりがつく。万物が熟している！」
そのこぶしには、僕や父のとは別種の血が流れているに違いない。

ご存知の通り、自分が子に財産や故郷や、それらがあればいいのと思ううわついた感情を与えなかったことを、僕の父は知っていたので、彼は、自分自身の一生を通して、手本を示したのだ！

この長年にわたる戦争で、毎日、顔を硬直させ、歪めながら、よだれを垂らした欲望に囲まれ、死を身近に意識して——厚かましく生を渴望する熱い衝動が、すべてのものからその覆いを剥ぎ取り、回りでは、血や背徳、腐敗が泥沼をなして淀んでいるのに——父は、それらに関わることなく、純潔のまま、そこを通り抜けていった！

彼が僕のためにそれを実践したので、僕は、いつも不毛な義務に束縛され、貧しく、夢も希望もなく生きることを早めに学んだ。

彼を手本にして、僕はそのことを学んだわけだ。

彼が僕に生涯の遺産として与えたのは、この感情だった。

ゆっくり進行する病気、貧困、悲哀、そして死。

これらが自分の人生に入り込んでくるのを、僕は妨げることができない。

これらが支配者であることを、僕は知っている！

しかし、後悔が僕の額に刻み込まれたり、嫌悪の言葉が僕の口から出ることはないだろう。

僕は、自分自身、自分の行動と考えについて言っているんだ！

運命は万物の支配者だが、そのことについては僕が支配者であり、運命は僕に強いることはできないのだ！

ロモント：

(肩をすくめて)

君はそんなに辛い運命を担ってはいないよ！

シャロレ：

(次第に興奮しながら)

最低の運び人夫だって、まともな葬式くらい出してもらえる！

こんなことが、信じられるかい？

判事たちには無理だろう。
彼らには立場ってものがあるから。

でも、大公にはできる。

それに、同族には、そうする義務があるはずだ。

父が彼らに借りのあることは確かだが。

今に、彼らがやってきて、父の遺体を請け出してくれるだろうよ。

女中：

（部屋に入ってくる）

伯爵さま。

あなたにお目にかかりたいという方が三人、そとにおいでですが。

シャロレ：

おそらく彼らだ。

彼らに違いない！

宿屋の主人：

（戸口で）

大尉さん。

昨日ここに来た三人ですぞ。

ロモント：

昨日の三人？

（急に笑い出し、シャロレに向かって）

「同族」だって！

「大公」だって！

昨日、法廷で卑劣な裁決を勝ち取った、あの三人のユダヤ人なんだよ！

やつらは・・・。

シャロレ：

債権者なのか？

彼らと話し合ってみよう！

ロモント：

今はだめだ！

シャロレ：

どうしてだい？

ロモント：

（包みと、シャロレの衣服、武具をかき集める）

今の君は疲れてるからだ！

体を洗って、服を着替えるんだ！

シャロレ：

服を着替える？

ロモント：

そうだ！

喪服にね。

それが君にはふさわしい！

この包みのなかに入れてあるからね。

シャロレ：

（うなずいて、つらそうに）

喪服がふさわしいのか！

こんな葬儀に！

ロモント：

（シャロレの肩に手を置く）

今は、ほんの数分でも休んでおくんだ。

その方がいい。

僕のいうことを聞いてくれ！

やつらは君を放ってはおかないんだから！

（シャロレは、部屋の方に体を向けている。宿屋の主人が戸口に駆けつけて、深くお辞儀をしながらドアを開ける）

シャロレ：

皆さんに入ってもらおう。

ロモント：

皆さんだって！

ならず者は待たせておけばいいんだ！

（シャロレとロモントは部屋の中にはいる。それから、宿屋の主人が入口のドアを開け、外に向かって叫ぶ）

宿屋の主人：

ここでお待ち下さい！

（三人の債権者が入ってくる。最初に飾り布の仕立屋、次に粉屋、最後に赤毛のイーツイヒ。彼らの後に宿屋の主人が続く。女中が次々に各人の望みを聞いてまわる。飾り布の仕立屋は腰をおろす。粉屋と赤毛のイーツイヒは立ったままである）

女中：

飲み物ですか、それとも料理ですか？

粉屋：

(彼は小柄な老人で、身なりはみすぼらしい。彼の声は哀れみを乞うようだ)

わしは何も食べたくないです。

飾り布の仕立屋：

(彼は大柄な白髪のもで、入念に着飾っている。彼は、威厳をもち、しかも実直そうに話す)

今日は断食日なので、ワインをいただきますよう！

イーツイヒ：

(彼は裕福な身なりをしている。髪の毛とあご髭は半白の赤毛である。彼が話している相手に顔を向けることはほとんどない。興奮したときだけ、彼の眼は生氣にあふれ、そのなげやりで、すげない口調は、硬く、恨みがましいものになる)

勘定は店持ちで、玉子二つ！

(女中は立ち去る)

粉屋：

(助けを求めるように)

あんたはどうお考えなんですか？

飾り布の仕立屋：

(信心深く目を上げながら)

できれば・・・。

粉屋：

あなたは、ご主人？

(主人は肩をすくめる)

粉屋：

イーツイヒ！

あんたはどう思う？

少なくとも一部は返してもらえるだろうか？

イーツイヒ：

(彼には顔を向けず、抑揚なく)

みんな返してもらえる。

元金だけだがね。

粉屋：

(嘆くように)

それじゃ、おれは飢え死しちまうよ！

イーツイヒ：

(そっけなく、抑揚をつけずに)

そうだ。

わしの知ってる粉屋は、みんな貪欲だからな。

飾り布の仕立屋：

冗談をいってる場合じゃない！

実際のところ、どうなんだ？

イーツイヒ：

冗談のひとつも言いたくなるさ！

宿屋の主人：

(おだてるように)

なあ、イーツイヒ！

お前さん、こいつらと取り引きがあるんだね！

イーツイヒ：

実をいえば、そうなんだ！

この取り引き、おれは始めから気が進まなかったんだ！

飾り布の仕立屋：

それで、どうなんだい？

イーツイヒ：

(そっけなく、早口で報告するように)

事情に通じたある人が、参事会ではこの件にかんして何も力を貸さないとの評決が下されたと、昨日、このおれに知らせてくれた。

戦争に費用をかけ過ぎているっていうんだ！

宿屋の主人の父：

でも、みんな將軍には・・・。

イーツイヒ：

(肩をすくめて、そっけなく)

死んだ將軍が何の役に立つんだい？

宿屋の主人：

(飾り布の仕立屋に向かって)

遺体を差し押えるってのは不当だよ。

今でも、彼がいなければ、おれたちは安心できないんだぜ。

彼は、糧食を兵士に配給するために金を使ったんだ。

兵隊たちが彼を「親父さん」と呼ぶのも当たり前だ。

それに、自分たちがどんなにみんなの不興を買うか、よく考えてみろ。

彼は著名人なんだ！
彼のために記念碑が建てられるだろうし、彼のことは、これからいつまでも物語られ、歌われるだろう！

イーツイヒ：
（鋭く、しかし相変わらずそっけなく）
へっ！
彼が有名なのは、彼がおれたちみたいな輩じゃないからだよ！

（粉屋を指差しながら）
この男は記念碑を建ててもらえるのか？
（飾り布の仕立屋を指差して）
この男は兵士に「親父さん」なんて呼んでもらえるのか？
騎兵たちが町を行進するとき、彼らは「赤毛のイーツイヒのマーチ」を吹奏してくれるのか？

他人の金で善人になることは簡単だ！
彼が有名でいられるのは、おれたちの金のおかげなんだ！
（女中が、ワイン壺とワイン・グラスの載った盆、玉子の二つ載った皿をもって入ってくる。彼女は、盆をテーブルの上に置いて出ていく）

飾り布の仕立屋：
（ワインを注ぎ、ためすようにグラスを鼻先に近づける）
おれたちは何ももらえないって、あんた考えてるのか？

イーツイヒ：
（うなづいて）
そうだ！

飾り布の仕立屋：
（ワインを飲み、グラスを手にしたままで）
おれにあんたの債権を売ってくれ！

イーツイヒ：
（探るように彼を見て）
あんた、それを買うつもりなのか？
わしゃ売らないね！

宿屋の主人：
あんた、さっきそれは何の価値もないって言ったじゃないか！

イーツイヒ：
この男がそれを買うつもりなら、それには価値があるさ。
これで一稼ぎしたなんて話は聞かないけどね。
（ひそかに）どうしたんだろう？

飾り布の仕立屋：
（粉屋に向かって）
あんたはどうなんだい？

粉屋：
イーツイヒがそれを譲り渡すのなら、おれもそうしよう。
さもなければ……。

イーツイヒ：
（飾り布の仕立屋をまじまじと見て）
あんたには、どこかの修道院に、立派な育ちの娘がいなかったかね？

粉屋：
そうだ、彼には修道院に入っている娘がいた！

飾り布の仕立屋：
（ワインを飲もうとしてグラスを口に近づけるが、それを急に下ろし、困惑して）

確かにいる。
しかし……。

イーツイヒ：
（非常に早口で）
「確かに」も「しかし」もない！
あんたが債権を安く買おうとしている理由が分かったぞ！
伯爵のところに出かけて、「娘をもらってやってください。
そうすれば私があなたの借金をすべて払いますし、持参金も付けて差し上げましょう」と言うつもりなんだろう！

飾り布の仕立屋：
（否定しながら）
どうしてそんなことを思いついたんだ？

イーツイヒ：
思いつくのも、ある種の才能さ！
そうじゃないのか？

飾り布の仕立屋：
（言い淀んで）
返す言葉もないよ！
しかし……。

イーツイヒ：
それでおれに訴訟を起こさせたんだな。

飾り布の仕立屋：

しかし・・・。

イーツイヒ：

ここまで言ったんだから、あとは自分で話せよ。

飾り布の仕立屋：

しかし、あんたの債権はどうなるんだ？

イーツイヒ：

事が成就したら、おれが現金で貸した分だけを払ってくれればいいんだよ。

飾り布の仕立屋：

全部かい？

イーツイヒ：

おれは利息分を損しているんだぜ！

飾り布の仕立屋：

ちょっと性急すぎるよ！

イーツイヒ：

あんたが今日伯爵を連れてこなけりゃ、もう手遅れだよ！

飾り布の仕立屋：

(粉屋に向かって)

あんたは？

粉屋：

イーツイヒと同じ意見だ！

イーツイヒ：

(軽蔑するように)

やつはくっついて行っただけさ！

自分では何も思いつかない！

飾り布の仕立屋：

(おだてるように)

おれたちの代表になってくれないか？

あんたはそれにもってこいの人だ！

粉屋：

そうだ、おれたちの代表になってくれ！

イーツイヒ：

(短く高笑いして)

おれを愚弄するつもりか！

お前たちが上品ぶってられるのも、おれがお前たちに代わって話してやっているからなんだぞ！

おれは冷酷で邪悪な人間だ！

どっちみち、誰もがおれたちのことをそう思ってるだろうさ！

(ロモントとシャロレが入ってくる。シャロレは黒い服を着ている。他のものは後ろにさがり、深くお辞儀する)

ロモント：

(意地悪く)

ユダヤ人たちはどこだ？

宿屋の主人：

(紹介する)

あちらがイーツイヒ、この二人が・・・。

ロモント：

(無視して)

分かってるよ。

(飾り布の仕立屋と粉屋に向かって)

お前さんたち、恥ずかしくないのか？

こんな奴といっしょで・・・。

シャロレ：

ロモント！

やめろよ！

あんたたち、私と話しがしたいんだね。